
最強の異世界人

ころころスリップ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の異世界人

【Nコード】

N9182M

【作者名】

ころころスリップ

【あらすじ】

最強の青年は空間を超え、もう一つの世界に降り立つ。設定と話の一部を除いて、文章を大幅に変更いたしました！元より読んでいた方、申し訳ありません。気に入らないようでしたら削除してしまってもかまいません。しかし！気に行って下さるようでしたらこれから宜しく願います。

プロローグ（前書き）

再始動です！

ブローグ

『俺』は、なぜか城にいた……
しかも、

『うごくな!』

今鎧や剣を装備した兵士「？」に囲まれている。

「……………訳がわからん。」

ここが今までいた所で無いのはすぐに分かった。

月が2つある時点で異常である。

（ここは何処なのか……）そう冷静に考え、思案していると。

『抵抗しなければ悪いようにはしません！大人しく捕まって下さい
!』

……………何故敬語？……………しかも信用できないなそのセリフ。

いきなり槍で囲んどいてそんなこと言ってくる者を信用できるはず
もない。

どうせこの程度ならすぐに倒せる、実力行使できてもなんの意味も
無さなのだが。

しかし、この者たちは悪意が有る訳ではない事は目を見れば分かる。

取りあえず話が通じそうなので、質問を投げかけてみる事にする。

相手が答えてくれれば何もしないが、答えなかった時は……

……

……殺る……

ここに来る前

俺の名前は、桜華峰 尊^{オウカミネ ミコト}

俺のいた国は軍事国家であり、実力主義であり、弱肉強食だった。

だから、

強くなるしかなかった………
生きるために

俺に親の記憶は無い。俺は捨て子だったから…
俺が捨てられていたのは、国が運営している軍事施設 - 名前はフィ
ルナ訓練所

この訓練所には、捨て子などが入る孤児院もかねており、
ある一定の年齢になると、徹底的な軍事教育がなされる。

男女とわずだ。

俺も例外ではなく、物心ついたときには、武器の使い方・心の殺し方・軍の決まりごと…

その他もろもろ叩き込まれた、かなり過酷な訓練所として有名だった。

たまに死人が出るほどに……………。

その中で、

俺は、

『天才』と言われていた……

他者の追隨を許さない圧倒的な力

教えられたことは何でも吸収し、己の力としていった。

13歳のときには戦場に出ていた

国の懐刀とまで言われた程の『天才』

軍に入った時には名前を知らない者はいないほどになっていた……

……

今俺は18歳、15で軍に入った俺は異常なまでの早さで軍の頂上まで上りつめていった。

いまでは、將軍と言われる軍の頂上にいる。「ちなみに將軍は3人いる」

しかも、軍の最高責任者である。「これは1人だけ」

「全員整列！」

いまは訓練中である。

「これから訓練を開始する！ここの外周を2周してこい！」

「えー！？ ここの外周って1周4キロありますよ！？」

「文句を言っな！行って来い！」

『この鬼……！！！！！！！！』

……………このとおり鬼將軍と言われていた。

しかし、訓練では鬼のようであっても気さくで権力を誇ったりしない尊は人気があったりするのだ。

あと、女性には別の意味で人気だったりする。

『別の意味で人気って？』

とか思った皆様！そのうちわかるので待っててね
ちよつと無表情なのがもったいないと言えはわかるかな？

そして、夜

そして、俺は運命が変わったとでもいう日、

訓練場で月を見ていた……………

報告

ここから先が、話を大幅に変えた所となっております。

訳は以前言ったとおりでありますよ！

だから気に入らない方はお気に入りに消していただいても結構です…

…上から目線かよ？…

と思っただけいらっしやるかもしれませんが……………

違います。

止める権利が無いんですよ…私。

アンだけやっというて今さらかよ？

だから今時の小娘は…

このダメ作者が！顔洗って出直してこいや？

……などなど、罵られても言い訳できません……

本………当申し訳ない………？

…こんな私でも許せると言う心の広い方だけでも構いません！

これからも宜しく願います！

この世界に来る前（前書き）

こちら辺から大幅に変わります！

この世界に来る前

尊は真夜中訓練場に来ていた。

この訓練場は他の訓練場の一番端の方にあり暗くなると人が全くと言っていい程近づかなくなる。

ここが、兵士達の寮の反対側にあるのと明りが有る場所から離れているため暗くなり、夜目が効かない者にはきついという事もある。

そんな場所に…しかも夜中に尊が来たのには理由がある。

今日は五十年に一度しか見られない月が出る日であり、普段は暗くなるまで行われる訓練が夕方で打ち切られた。

この日は世界中の人々が平和を願い祈りを捧げる日

人々に神聖化させられている『緋月^{ヒゲツ}』…その月が今この夜空に浮かんでいる。

その月は普段は金色に輝いているがこの特別な日だけ深紅に染まりこの世界の近くまでくる。

なぜこの色に染まるのかまだ分かっていない事もあり、世界の七不思議のひとつに挙げられている。

「綺麗…と言うのだろうなこれは。」

そうポツリとつぶやくと月から目をそらす

尊にはそういう事がよく分からなかった。

幼少時代から閉鎖的な世界で生きてきたからという理由と………今でも余り自由と言うモノを許されない事も相まって、一般的な常識や感情などが一部欠落してしまっているからというのが理由だ。

はあー

そう白い息を吐きだし、その白い息が流れて消えていくのを見つめた後また月に目を戻す。

人々は今祈っている事だろう

平和を。

戦をしている所では早く戦が終結し平和が戻る事を願い、

そうではない所でも平和な日々が続くように月に祈りを捧げているだろう。

ある者は戦友や友人と、

ある者は恋人や家族と。

しかし、尊は祈りを絶対に捧げたりしない。

尊は沢山の人の命を刈り取って来た。

それは歴戦の猛者でもかなわない程の人数に値^{あた}するであろうと言われるほどのだ、

人を殺せばその手は血に濡れ、殺した者の心を殺す。

尊は幼い頃から人の命に手をかけてきた。

そんな者に平和を願う事など許されるものだろうか？

そう心の奥深くで思っているのだ尊は。

それに、いくら願っても尊の元に平和が訪れることはあり得ない。

尊に平和が訪れる時……それは……

尊が命を落とし、帰らぬ人となる時以外にはありえないであろう。

尊を縛る鎖は硬く、重い、心の奥まで刻み込まれていいるこの鎖を解き放つ時はおそらく来ないであろう。

そう、尊はとうの昔に悟っていた。

そう初めて悟ったのは初めて人を殺めた時……。

幼いころの記憶は尊の心に影を落とす

そして、その記憶は一生心に残る傷となって尊を一生蝕み続ける。

冷酷な人間になれていれば…もしくは力の無い人間だったのならこんな風には成らなかったのだろう。

しかし、一方になれば感情が完全に欠落してしまっていたかもしれない、

もう一方では、幼い頃に命を落としていたであろう。

その代わり苦しまずにすむ。

しかし、それは尊の心と力が許さない。

幼いころから精神力が強かった、そして何より格闘センスがすごかった尊にはどちらも許されなかった。

初めの方から浮いていた……今でもそうだが。

「そろそろ戻るか…」

そう思い月から目を離し尊は歩きだそうとしたその時、

月がいきなり先程とは比べ物にならない位の光を放ち始めた。

『何事だ?』

そう思った時意識が闇に吞まれていくのが何となく分かった。

意識が完全に途切れる前に一瞬だけ見えた月は緋色だった筈なのに蒼く染まっていた気がした。

そして…

「さあ！大人しく捕まりなさい！」

さつきから五月蠅く言ってくる奴は他の兵士と違う格好をしていることから、地位が高い者だという事がうかがえる。
そして何より命令口調が板についている。

と言う事は普段から命令する側の人間……指揮官なのだろう。

「何でだ？」

冷静に質問を投げかけてくる尊になぜか驚きながらも答えてくれる

「……………それは陛下からの指示で連れてくるように承^{うけたまわ}っているからです。」

「……………（陛下？）……………何でそんな奴が俺の事を呼んでいるのか分からないが、なんで連れて行くだけでそんな人数なんだ？」

確かに言えている事である。一人連れて行くのに何故そんな人数が必要なのか分からない程の大人数で尊^{みこと}を取り囲んでいる。ざっと数えて60人ほどだ。

「……………前回いらつしゃった方がパニックを起こしてしまい……………格闘戦になってしまっ……………」

（前回……………俺と同じような事に遭遇してしまったやつが居ると言う事か？）

尊は冷静に相手の言葉から現状を把握していく。

幼いころから『何事にも冷静に対処しろ。それ位の事も出来無いようでは使い物にならん』と、脳に擦り込む様に覚えさせられた所為で今では何が起こっても大丈夫になっていた。…感情が薄くなってしまうと言う事もあるが、尊はかなりの数の修羅場をくぐりぬけている事も有り、当然とも言えるだろう。

そして、その他にもいくらか質問し答えてくれた話の中で出てきた言葉の断片を繋ぎ合わせる事で分かった事はこうだ。

前に尊と同じ境遇になった奴はいきなりの事に訳が分からずパニックを起こした？数人の兵士達が王の所に案内するため近寄ってくる？そいつはいきなり来た兵士達に捕まるか殺されるとでも思ったのか必死に抵抗？兵士達はそいつを落ち着けようと奮闘？しかしそれは逆効果？もつと激しく抵抗？そいつは強かったせいでなかなか決着つかず？やつとのこととで落ち着かせる事に成功するも、その戦闘で助太刀で増えていたかなりの人数の兵士達負傷？王はまたパニックを起こしてまい同じ状況になるかもしれないと予想？また戦闘になった時のために兵士大量投入？今の状態

………こんなところだろうか？

そんな事を思っている尊に気付きもせず、指揮官だろうと思われる男はここに来る少し前に陛下に言われた言葉を思い出していた。

『前にいらつしゃった方はパニックを起こして大変な事になったのは軍の中でも有名な話でしょう？今回の方も同じ様になる可能性があるるので絶対油断してはいけませんよ？気を引き締めてください。』

そう普段はあまりしない様な真剣な表情で忠告してきたので、『分かりました。お任せ下さい』と気合を入れて、神経を張っていたのに拍子抜けだと指揮官らしき者は思っていた。

それに凄いと、

普通だったらいきなり知らない場所に居たら驚くか、パニックを起こすか、ちよつとした放心状態になってしまってもおかしくない。

それなのにこの男は動揺もせず、質問まで出来るほど落ち着いている。^尊

それに、立ち姿に隙が無い…

この男は只者ではないと直感で感じ取っていた。

この先どんな事が起こるのか少し楽しみにしながら、陛下の元へ連れて行くべく男（年齢分らない）に問いかける。

「付いて来てくれませんか？この事の説明などは陛下が教えてくれると思うので……。いろんな疑問が有るかもしれませんが私は細かい事までは理解しておりませんし。」

この後すぐに了承をもらえたと言っておこう。

道ながら・・・

「では17小隊以外は解散！ 皆自分の持ち場に戻れ！」

指揮官の命令で、兵士達は思い思いの場所に散っていき、最後に十名だけ残った。

「では、私の後ろを付いて来て下さいね。この王宮は無駄に広いので初めて訪れた方は大抵迷子になって帰れなくなり、搜索する事になってしまう事が良くあるので……馴れれば大丈夫なんですけど。」

「…分かった十分に気を付けよう。」

そして王宮内に入っていく。

十名の兵士は、後ろに付いて来ている。まだ尊のことを警戒しているようだ。

そしてこの一行は、侍女やその他の兵士の視線を一齐に集めていながら、尊とこの指揮官は全く気にせずどんどん回路を進んでいく。

「はい、助かります。」

…あ、私の名前言ってませんでしたね。私の名前はロルアント・メルサイスです。

軍での立ち位置は王立騎士隊隊長をしています。長い付き合いになりそうなので宜しくお願いします。」

「俺は桜華峰尊だ……なんで隊長なんてやっている者が迎え何ぞに

……軍のトップだろう？いくら王の使いだとは言ってもおかしくはないか？」

そう首を傾げて尊は言う。

なぜそんな軍のトップに居る者がこんな事をしているのかと。

ロルアントは苦笑しながら答える。

「そうですね…ミコト殿は知らないんですね。」

「何がだ…そしてその殿って何だ？」

「殿の方はお気になさらず……一つ目の質問に答えますと、私は軍のトップではありません。私の上には総隊長殿がいらっしゃいますから。」

二つ目の質問に答えますと、ミコト殿、貴方はご自身が思っている程軽い存在では無いのです。

この世界が貴方の住んでいた世界では無い事に気付いているでしょう？。」

「……ああ、月が二つ…しかも色が俺の世界に有った月とはかなり違う色をしているからな。」

そう溜息を吐いて尊は外が見える方を向き夜空に浮かぶ双子の月を見る。

その夜空に浮かぶ双子の月は尊の普段見ている月より断然大きく…そして、尊の世界では金色のだった筈の月は、片方は藍色もう片方は黄緑色に染まっていた。

「信じたくない事だが、信じざる負えないだろうなコレは。」

月の数や、大きさ、色を変える事なんて人に出来るはずもない。これを見てしまえば《異世界》と言われても信じざる負えない……尊は現実を淡々と受け止めている。

「（この方は何故こんなにも落ち着いて居られるのだろうか？）…

……この世界では貴方の様な肩を《異世界者》と呼んでいます。まあ、この呼び名は国や地方によって多少の違いはありますが大して変わらないでしょう。

そして、貴方はこの世界で貴重な存在なのです。」

「……貴重……？。」

「そうです。この世界に有るほぼ全ての国が《異世界者》を欲しがると言っても過言ではありません。

そして、この世界で《異世界者》は沢山の特権が与えられる。」

「……特権？」

「詳しくは陛下に聞いてください。

この国に《異世界者》が来たのは五百年ぶりなのです。そして確か三百年前にいらっしゃった方を最後にこの世界へ来た方はいらっしゃいませんでしたのでミコト殿が久しぶりですね。」

「そうなのか？」

「ええ、二百年に一人と言った感じでいらっしゃいます。

まあ、今回は随分間が空きましたがミコト殿がいらっしゃいました

でしょう?」

「…不本意だな。」

「皆さんそんなもんだそうですよ文献によると。」

「…そんな物まで有るのか…」

「何か言いましたか?」

「…いや」

「そうですか…ここが陛下の執務室になります。私もお供しますの
で。」

そこにはとても大きい両開きの扉が有り、両脇には見張りの兵士が
一人ずつ立っている。

尊が無駄に大きい…と思っているうちにロルアントは、その扉を叩
く。

トントン

「陛下、連れてまいりました。」

その言葉に少し低めな声が返ってくる。

「入れ。」

「失礼いたします。」

ロルアントは尊に私に付いて入ってきてと目配せすると馴れた様子で扉の奥へ入って行く。

尊はその後が続いて入っていくと中には二人の女性とロルアントを除く五人の男が待っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9182m/>

最強の異世界人

2011年5月14日08時17分発行